

『とりかへばや物語』にみる重層的交換

— 麗景殿の女と吉野の姉君 —

藤井由起

はじめに

『とりかへばや物語』は、内向的な男君と外向的な女君の異母きょうだが、本来の性とは異なる社会的な性別を付与され、それを疑うことなく引き受けて成長するところから始まる。『とりかへばや物語』を女君に即してみれば、出仕(社会的な性の偽装)、結婚(生物学的な性の偽装)などを経て、異装発覚(社会的な性の破綻)、そして出産(生物学的な性の同定)などの出来事を経て、本来の性に「とりかへ」を行い、その後大団円を迎える物語である。物語の主要モチーフは、このきょうだいの異装解除、つまり社会的な「男女」の「とりかへ」にあることはすでに明らかにされているが、実はそれだけでなく、物語の中ではほかに多岐にわたって「とりかへ」られているものがあることが指摘されている。¹⁾ 物語の中に隠された「とりかへ」の様相を、さらに明らかにする必要がある。

本稿では、その一端として、中納言(女君)が五節の夜に出会った《麗景殿の女》と、吉野の宮の長女(以下、《吉野の姉君》)とをとりあげる。二人とも物語の展開に大きな影響を及ぼすわけではないが、男君にとっては、一方は春宮女御となる実子の母親(麗景殿の女)であり、一方は正妻(吉野の姉君)である。ともに人間関係の上からは、大きな存在といえる。

『とりかへばや物語』は、先行物語を摂取していることが様々な論じられているが、特に人物像の摂取の様相が多岐にわたる。様々な人物像の摂取は、はたして無秩序になされているのだろうか。そこに何か法則性を見出すことはできないか。先行諸説を踏まえつつ、以下『源氏物語』摂取の観点から、人物像の「とりかへ」について考察することとする。

なお、本稿では、藤中納言のむすめ方の子を女君、源宰相のむすめ方の子を男君と、本来の性により呼ぶこととする。また、式部卿

の宮の子を宰相中将と呼ぶ。さらに、区別を明瞭にするために『とりかへばや物語』の女君を《》、『源氏物語』の女君をへで括弧で表し、また、『とりかへばや物語』本文を指し示す記号は、A、B、C…で、『源氏物語』本文は、a、b、c…で表すこととする。

一、《麗景殿の女》—《花散里》から《明石の君》へ—

(一) 出会いの日時と出自—《花散里》像の摂取—

《麗景殿の女》は、物語に三度登場するが、まずはこの《麗景殿の女》と女君及び男君との出会いについて考える。

男性として育った女君は十二歳で元服し、昇進を重ねていく。十六歳で中納言になり、右大臣家の《四の君》と結婚するが、実際には女性同士であり、上辺だけの結婚生活を送っている。そんな折の五節の日、中院に行幸があった。その参列の中で、宰相中将と女君との青摺姿はひときわすばらしく、それを見た《麗景殿の女》から、女君は文を届けられる。無視してしまうのも憚られた女君は、周りの静まった深夜、月明かりのもとで女と歌をよみかわす。《麗景殿の女》の最初の登場場面である。

A 1 《麗景殿の女》と女君の出会い①

逢ふことはなべてかたきの摺衣かりめに見るぞ静心なき

と、いとをかしげなるを、……騒がしければ返事もせず、……

こと果ててみな人も静まりぬるに、夜深き月のいと明かく澄めるに麗景殿の細殿をとかくたたずみて、

逢ふことはまだ遠山の摺目にも静心なく見ける誰なり

とうそぶくに、人声もせず。人もなきにやと思ふに、文出だしたる一の口に、

つる一の口に、

めづらしと見つる心はまがはねど何ならぬ身の名のりをば

せじ

と答へたる気色も、なべてならずをかしかなり。

(巻一・一九七—一九八)

この場面は五節の日、そして「夜深き月」とあることから、一月中旬と考えられる。ここでは、二人は歌を詠みかわすだけにとどまり、人の気配がしたので女君はその場を立ち去る。「心はまがはねど何ならぬ身」と詠んだ女に、心と身の不一致を嘆く女君は、感じるどころがあったのであろう。しかし、「逢ふことはなべてかたき」、「逢ふことはまだ遠山の」と詠みかわしているように、二度目の出会いは二年四ヶ月後のことである。

二度目は、女君十九歳のときのことである。宰相中将に異装を見破られ、その結果として妊娠してしまったため、女君は宇治へ身を隠すことを決意する。その失踪を前に、五節の日に出会った《麗景殿の女》を思い出して会いに行く。巻二最後の場面である。

A 2 《麗景殿の女》と女君の出会い②

内裏の御宿直なるに、二十日あまりの月もなきほど、闇はあや

なしとおぼゆるにほひにて、五節の頃、「なべてかたきの」とありし人を思ひ出でて、殿上人などしづまりたるに、麗景殿のわたりをいと忍びやかに立ち寄りて、……同じ心なりけるも過ぐしがたくて、立ち寄りたまひぬとぞ。(巻二・三〇九〜三二〇) ここでは、「二十日あまり」と日時が設定されている。前後の内容から考えると三月である。そして「月もなきほど、闇はあやなしとおぼゆるにほひにて」とあり、まだ月が昇る前の闇夜であることを確認しておきたい。この後、二人は歌をよみかわし、女君は以前と変わらぬ「同じ心」であった《麗景殿の女》のもとで一夜を明かすのである。

三度目は女君と男君の「とりかへ」後のことで、男君二十歳のときのことである。女君と入れ替わる際に、「公私かかる御物語の中に、麗景殿の細殿に折々行きあひし人のことなどをさへ語り出でて」(巻三・三八九)と、女君から伝え聞いていたことを思い出し、女のもとを訪れ、一夜を契るのである。

A 3 《麗景殿の女》と男君の逢瀬

四月二十日あまり、祭など過ぎて、内裏わたりつれづれなるころ、督の君のものついでに語り出でたまひし麗景殿の細殿のこと思し出でて、そなたさまにおはしてたまたまふを、女は……今宵もつくづくと端をながめて居たるほどに、夜目にもしるき御有様、さよと心得るに……(巻四・四七六)

「つれづれなるころ」に男君が「思し出でて」訪れ、「端をながめ

』とりかへばや物語』にみる重層的交換 (藤井由起)

て」いた《麗景殿の女》が迎える。ここでも「四月二十日あまり」とあり、二度目と三度目は同じ「二十日あまり」の日が設定されている。物語内で時が記されているものの中で、「二十日あまり」の日はこの二カ所のみである。《麗景殿の女》の登場場面は、意図的にこの日が設定されているのではないだろうか。では、なぜ「二十日あまり」の日を設定する必要があったのか。それを考えるにあたり、《麗景殿の女》の特徴として、その出自が挙げられる。

B 《麗景殿の女》の出自

女も、(麗景殿の)女御の御妹やうの人なるべし、なべての気色ならずと見知らるれば、情けなからぬほどに語らひて、人々来る音すればうち忍びてたち別れぬ。(巻一・一九八〜一九九) 傍線部の推測は女君のものであるが、この女は「麗景殿の女御の妹」という出自によって、すでに『源氏物語』の《花散里》の投影が指摘されている。《花散里》もまた、麗景殿の女御の妹の三の君であった。

b 《花散里》の出自

麗景殿と聞こえしは、宮たちもおはせず、院崩れさせたまひて後、いよいよあはれなる御ありさまを、ただこの大將殿(源氏)の御心にもて隠されて過ぐしたまふなるべし。御妹の三の君、内裏わたりにてはかなうほのめきたまひしなごりの、例の御心なれば、さすがに忘れもはてたまはず、わざともてなしたまはぬに……(2)《花散里》(一五三)

『源氏物語』では〈麗景殿女御〉自身に子がないと語られているが、『とりかへばや物語』においても、「麗景殿の女宮だになどかおはしまさざらんと世とともに嘆きたまふに」(巻四・五一九)と、同様に『麗景殿女御』には子がないと語られており、ここにも共通点がある。では、共通しているのは、出自だけであろうか。そのほかに通点はないのか、〈花散里〉と源氏との逢瀬の場面と比較してみたい。

『源氏物語』における〈花散里〉の登場は、源氏が〈藤壺の宮〉や〈朧月夜〉との恋に思い煩い、また右大臣方の台頭によって厭世感を抱いているところである。次に引用するのは、思い悩んでいることの一つとして〈花散里〉のことを思い、源氏が〈花散里〉を訪れようとするという場面である。

a 1 〈花散里〉と源氏との逢瀬①

このごろ残ることなく思し乱るる世のあはれのくさはひには思ひ出でたまふには、忍びがたくて、五月雨の空めづらしく晴れたる雲間に渡りたまふ。……まづ、女御の御方にて、昔の御物語など聞こえたまふに、夜更けにけり。二十日の月さし出づるほどに……

②花散里・一五三〜一五六

〈中川の女〉のもとで歌をよみかわした後、まず〈麗景殿女御〉のもとを訪れ、その後〈花散里〉のもとを訪れる。〈麗景殿女御〉のもとにいる時点で「二十日の月さし出づるほど」とあり、この日は二十日であることが明らかである。

また、二度目の登場は次の年のことである。「三月二十日あまりのほどになむ都離れたまひける」(②須磨・一六三)とあるように、須磨に退去することを決意した源氏が、「三日かねて」(②須磨・一六四)まわりの人々に別れの挨拶をする。〈花散里〉にも会っておかなければと考えた源氏は、夜更けに訪れる。

a 2 〈花散里〉と源氏との逢瀬②

花散里の心細げに思して、常に聞こえたまふもことわりにて、かの人もいま一たび見ずはつらしとや思はんと思せば、その夜はまた出でたまふものから、いとものうくて、いたう更かしておはしたれば、……いと忍びやかに入りたまへば、すこしぬざり出でて、やがて月を見ておはず。またここに御物語のほどに、明け方近うなりにけり。……例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに濡る顔なれば、

月影のやどれる袖はせばくともとても見ばやあかぬ光をいみじと思ひたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空なが

めそ……」

②須磨・一七四〜一七五

三月二十日あまりに須磨へと旅立つ源氏。その二三日前の夜更けのことだと語られる。

この場面では、月が西に沈む様子が、源氏の帰る様子になぞらえられている。二人は歌をよみかわすのだが、〈花散里〉の歌で、源氏

を「月影」に譬え、「とめても見ばや」といい、その返歌として、源氏が「月影のしばし曇らむ空ながめそ」と、自分自身を月影に譬えて、自分が京を離れるので月影が曇る空をながめないでくださいと返す。女君が妊娠のために宇治へ失踪する前に、『麗景殿の女』のもとを訪れるA2の場面は、このa2の場面との類似を指摘できる。A2、a2ともに三月二十日あまりの日であることはもちろんである。その上、男は女のことを「思し」て、「いと忍びやかに」訪れるという共通点がある。また、源氏は須磨への退去前、女君は宇治への失踪前という切迫した状況も重なる。この「京を離れる直前」という状況を撰取して、A2ではa2の場面の源氏と同じように、女君を月影に譬え、宇治へ失踪することの暗示として、『麗景殿の女』との二度目の逢瀬の場面を月影（女君）のない闇夜に設定したのだと考えられる。

そして、源氏が明石から戻り、初めて『花散里』のもとを訪れる場面である。

a3 『花散里』と源氏との逢瀬③

五月雨つれづれなるころ、公私もの静かなるに、思しおこして渡りたまへり。……女御の君に御物語聞こえたまひて、西の妻戸には夜更かして立ち寄りたまへり。月おぼろにさし入りて、いとど艶なる御ふるまひ尽きもせず見えたまふ。いとどつつましけれど、端近ううちながめたまひけるさまながら、のどやかにてものしたまふけはひいとめやすし。

『とりかへばや物語』にみる重層的交換（藤井由起）

② 濤標・二九七（二九八）

源氏は例のように、夜が更けてから『花散里』のもとを訪れる。夜更けに月の光がさしこんでいるので、これも二十日過ぎあたりではないかと考えられる。『花散里』は「端近く」で「月影」の戻った空を眺めている。A3とa3には、「二十日あまり」の日であり、「つれづれなるころ」に「思し」て出かける男、「端」「ながむ」女という共通点がある。男は夜目にも明らかに素晴らしく、女がそれを見ているのである。

以上に見るように、『花散里』と源氏の逢瀬は全て「二十日あまり」の日なのであった。したがって、女君、男君と『麗景殿の女』の出会いの日を「二十日あまり」の日に設定したのは、『花散里』の人物像を撰取したためではないかと考えられる。

以上から『麗景殿の女』と『花散里』の共通点としては、一、麗景殿女御の妹であること、二、男と会うのが二十日あまりの日であること、三、登場場面で男が月に譬えられていること、四、そして先に挙げた細かな状況の類似が見てとれるのである。さらには、用例2と3の前後で大きな変化があったことが挙げられる。『とりかへばや物語』においては、女君と男君の「とりかへ」前後であるとということ、そして『源氏物語』においては「須磨・明石」前後という物語の大きな転機の前後に重なる。以上の点から、『麗景殿の女』は『花散里』の人物像を撰取していることが確実である。

しかしながら、物語の中の時間を追っていくと、女君と男君の「とりかへ」後、何年か経過した後のことが年単位で語られる物語末尾では、二人の女性の人物像は重ならない。物語末尾において、『麗景殿の女』は姫君を産み、その姫君が入内する。姫君を産んだということに着目するならば、そこに〈花散里〉の人物像は見るべくもないのである。『麗景殿の女』は〈花散里〉像から解放されて、独自の人物を形成し始めるのだろうか。『源氏物語』にそのモデルとなる人物は見出だし得ないのだろうか。

(ii) 春宮妃の母—〈明石の君〉像の摂取—

『とりかへばや物語』の物語末尾は、後日談ともいうべき女君と男君のその後、そして二人の子どもたちのことなどが語られる。

女君は帝との間にすでに一宮を産んでおり、その後次々と二宮、三宮、姫宮を産んだことが語られる。物語末尾ではその一宮が立坊、女君は立后する。男君と『四の君』の間には男子が三人続いて産まれ、『女院』(かつての女春宮)腹の若君も童殿上する。宰相中将と女君の子、宇治の若君も童殿上し、女君の母親だと名乗れないことによる苦悩が語られる。そのあとに、思い出したかのように『麗景殿の女』のその後が語られるのである。

C 『麗景殿の女』のその後

まことや、大将殿は、麗景殿の人はさすがに行くてに思し捨ててやみたまはんも心苦しかるべき人様なれば、さりぬべき折々

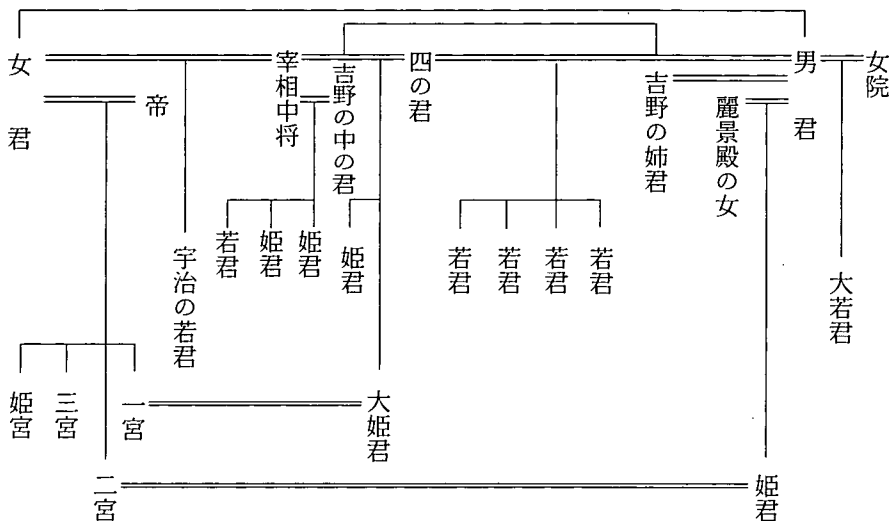
は忍び忍びに語らひたまふほどに、いとうつくしき姫君一人生まれたまひしを…… (巻四・五一九)

『麗景殿の女』は、男君との間に姫君をもうける。男君はその子を自分の二条殿に引き取りたいと考えるが、『麗景殿の女』の姉である『麗景殿女御』に大変かわいがられたので、『姫君』は引き取られることなく麗景殿で育てられた。その後、また何年かの年月が過ぎ、女君男君の父である関白左大臣は出家し、男君が左大臣となる。若君達も元服する。帝が退位したため、女君の一宮が帝位につき、二宮が春宮となる。宰相中将と『四の君』の密通の子『大姫君』が帝の女御として入内し、それに引き続いて、「この麗景殿にて生ひ出でたまひし姫君、春宮の女御に参りたまふ」(巻四・五一九〜五二〇)と語られる。男君の妻子のうち、ただ一人の『姫君』は春宮女御となるのである。

ここで、姫君を産み、またその姫君が入内するという点に着目するならば、『源氏物語』では〈明石の君〉が想起されよう。『源氏物語』では、源氏が明石から帰京し、政治の場に復帰した後、朱雀院が退位し、冷泉帝が即位する。その後、〈明石の君〉の出産が語られる。

c 〈明石の君〉の出生

まことや、かの明石に心苦しげなりしことはいかにと思し忘るる時なければ、公私いそがしき紛れにえ思すままにもとぶらひたまはざりけるを、三月朔日のほど、このころやと思しやるに



人知れずあはれにて、御使ひありけり。とく帰り参りて、「十六日になむ。女にてたひらかにものしたまふ」と告げきこゆ。

(② 落標・二八五)

そして、その子〈明石の姫君〉は、六条院の〈紫の上〉のもとにひきとられ、「明石の姫君の」御参りの儀式、人の目おどろくばかりのことはせじと思しつめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや」(③ 藤裏葉・四五〇)とあるように、春宮のもとに入内する。源氏のただ一人の姫君も春宮女御となっていたのである。

このように、《麗景殿の女》と〈明石の君〉には、男との間に姫君をもうけ、その姫君が春宮のもとに入内するという共通点があるのである。そして、その姫君は《麗景殿女御》、〈紫の上〉という、子のない女に育てられることも共通している。さらに、二人とも二条院(『とりかへばや物語』では「二条殿」)には入っていないことも共通している。《麗景殿の女》は、〈明石の君〉の人物像も摂取しているのがあった。

以上に見てきたように、《麗景殿の女》一人に、『源氏物語』の二人の人物像摂取の痕跡を確認することができるのである。すなわち《麗景殿の女》は、物語本編では〈花散里〉、物語末尾では、〈明石の君〉の人物像を摂取して、人物造形が行われているのである。

二、《吉野の姉君》—《明石の君》から《花散里》へ—

(i) 松風と人笑へ—《明石の君》像の摂取—

《四の君》の密通による妊娠、そしてその相手が宰相中将なのではないかという疑惑から、この世を厭う氣持が強くなった女君は、吉野に人知れず暮らす宮がいると聞き吉野へと赴く。そこで吉野の宮に、二人の娘を紹介される。女君と《吉野の姉君》は何度か歌を交わすが、その中に繰り返し「松風」が現れる。この「松風」について注意してみたい。

Dア 女君と《吉野の姉君》、歌の贈答①

(姉君) 絶えず吹く峰の松風我ならでいかにと言はん人影
もなし

ほのかなるけはひ、いみじくあてに心恥づかしくよしあり、心
にくきほど、都にもかばかりのけはひはありがたうおぼゆる
に、いづれならんと思ふもいとど心もとなければ、

(女君) 大方に松の末吹く風の音をいかにと問ふも静心な
し (巻二・二四四)

Dイ 女君と《吉野の姉君》、歌の贈答②

(女君) 静心あらしに身をぞくだかまし聞き馴らひぬる峰
の松風

女君も、目もあやになつかしうあはれげなる御有様を見ざらん
は、いますこしさうざうしさまさりぬべくおぼえて、

(姉君) 年を経て聞き馴らひつる松風に心をさへぞ添へて
吹くべき (巻二・二五一)

Dウ 女君と《吉野の姉君》、歌の贈答③

(女君) またも来て憂き身隠さん吉野山峰の松風吹きな忘
れそ

あやしく例ならぬ御気色かなと、うち泣かれつつ、

(姉君) ほどな経そ吉野の山の松風は憂き身あらじと思ひ
おこせて (巻三・三二六)

Dアは吉野の宮に導かれた女君と《吉野の姉君》の出会いの場面
だが、ここで「吉野に絶えず吹く松風と私のほかに」と、松風と
姉君は並列され、松風の存在は吉野の地、そして姉君と近いもの
として認識される。Dイでは、女君は《吉野の姉君》に後ろ髪を引
かれつつも、妻である《四の君》、右大臣家の手前もあり、それほど
長い間吉野にとどまるわけにもいかず、京へ帰ろうとしているのだ
が、そこでも《吉野の姉君》が「松風」に譬えられている。また、
Dウで、女君は宰相中将との子を身ごもった際、宇治へ身を隠す直
前に吉野へ赴き別れの挨拶をするのだが、ここでも《吉野の姉君》
は「松風」に譬えられている。このように、《吉野の姉君》が自らの
ことを松風に譬えたり、吉野という土地が松風とともに語られたり
している。ことさらに「松風」が現れるのも、人物像の摂取による
のではないかと考えられる。

『源氏物語』において「松風」とともに語られるのは、《明石の

君である。

d あ 源氏の琴と松風

広陵といふ手があるかぎり弾き澄ましたまへるに、かの岡辺の家も、松の響き波の音にあひて、心ばせある若人は身にしみて思ふべかめり。
(②明石・二四〇)

d い 〈明石の君〉の琴の音が松風に響えられる

「……山伏のひが耳に松風を聞きわたしはべるにやあらん。いかで、これ忍びて聞こしめさせてしがな」と聞こゆるままに、うちわななきて涙落とすべかめり。
(②明石・二四二)

d う 岡辺の宿

三昧堂近くて、鐘の声松風に響きあひても悲しう、巖に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。
(②明石・二五六)

d え 大堰の邸

なかなかもの思ひつづけられて、棄てし家居も恋しうつれづれなれば、かの御形見の琴を掻き鳴らす。をりのいみじう忍びがたければ、人離れたる方にうちとけてすこし弾くに、松風はしたなく響きあひたり。
(②松風・四〇七)

d お 源氏との歌の贈答

契りしに変わらぬことのしらべにて絶えぬ心のほどは知り
きや

女、

変らじと契りしことをたのみにて松のひびきに音をそへし

かな

d か 六条院冬の町

西の町は、北面築きわけて、御倉町なり。隔ての垣に松の木しげく、雪をもてあそばんたよりによせたり。
(③少女・七九)

d き 〈明石の君〉と〈明石の中宮〉歌の贈答

姫君の御方に渡りたまへれば、童、下仕など御前の山の小松ひき遊ぶ。若き人々の心地ども、おき所なく見ゆ。北の殿よりわざとがましくし集めたる鬚籠ども、破子など奉れたまへり。えならぬ五葉の枝にうつる鶯も思ふ心あらんかし。

「年月をまつにひかれて経る人にけふ鶯の初音きかせよ音せぬ里の」と聞こえたまへるを、げにあはれと思し知る。

……

ひきわかれ年は経れども鶯の巢だちし松の根をわすれめや
幼き御心にまかせてくださしくぞある。

(③初音・一四五〜一四六)

「松風」は琴の琴、波、鐘、泣き声などと響き合せて聞こえてくる。d あくきのように、〈明石の君〉は「松風」とともに語られる。

また〈明石の君〉の琴の音が「松風」(d い)に響えられてもいる。また、初音の巻で、〈明石の君〉と〈明石の中宮〉が歌をよみ交わす場面がある。六条院に移って初めての春のことで、新年の〈明石の中宮〉との歌の贈答である。「まつ(明石の姫君)にひかれて」過ごしてきた〈明石の君〉、「巢立ちし松」(実の母)を忘れないという

《明石の中宮》、ともに「松」に譬えられている。また、《明石の中宮》を「小松」と譬える例もある。⁽³⁾このように、《明石の君》自身、またそのまわりにも松が多く現れるのである。やはり《吉野の姉君》の人物像は、この《明石の君》の人物像を撰取しているものと認められる。それでは、「松風」のほかに二人の共通点はないのだろうか。

『とりかへばや物語』において、男君と女君の「とりかへ」後、《吉野の姉君》は京へ迎ええられる。男君は源氏と同じように「吉野山の女君迎へきこえんと思して、二条堀川のわたりを三町築きこめて、三葉四葉に造りみがきたまふ」(巻四・四四五)と、邸宅を造り、そこへ《吉野の姉君》、《中の君》を迎えるのだが、二人は始めからすんなりと上洛したわけではない。次に挙げるのは、男君が「とりかへ」後、吉野籠りをやめて京へ戻る際、一緒に上洛をと誘った男君に対しての《吉野の姉君》の反応である。

Eア 男君に上洛を促された《吉野の姉君》
 ……さるいみじき所に、人にも似ずうひうひしくてにはかにた
 ち出でて、人笑はれに、憂きこと添ひて帰り入らんも松の思
 はんこと恥づかしきを、と思ひて、ことの外に思ひ離れて誘は
 るべき気色もなきを……
 (巻三・三九八)

《吉野の姉君》は、「人笑はれ」になるようなつらいことが起こって吉野に帰ってくるのも恥づかしいことだからといって男君の提案に首肯しない。そこで、男君は京で受け入れる態勢を整えてから迎

えることにして京へと帰って行く。そしてその後、二条の新邸が完成し、男君は《吉野の姉君》を迎えに行く。それでもやはり《吉野の姉君》は「人笑はれ」になることを心配しつつ上洛するのである。

Eイ 吉野を離れる《吉野の姉君》の心情
 ……なほ世に似ずうひうひしき有様にて、都に出でて人笑はれに憂きことのみこそあらめ、さらばまた、見えぬ山路も、こここそ頼みてつひの住処とも思ふを、年ごろに変はらず住み荒さでおはしまさんこそうれしからめ、ここを荒し果てたまはんことはなほ心細かりぬべく思さるれど、さかしきやうなれば、さも聞こえたまはず。
 (巻四・四六一)

さて、一方の『源氏物語』では、《明石の君》が源氏に上洛するよう勧められる。

e 《明石の君》、源氏に上洛を勧められ当惑
 ……こよなくやむごとなき際の人々に、なかなか、さてかけ離れぬ御ありさまのつれなきを見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりのおぼえなりとてかさし出でまじらむ、この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれめ。たまさかに這ひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へにはしたなきこといかにあらむ。
 (②松風・三九七～三九八)

《明石の君》も「人笑へ」になることをおそれており、二条院には入らず、大堰の邸へ移るといふ段階を踏んで六条院へと入るのである。二人のこの心配は、己の身分の低さから出たものであろう。

この二人は鄙から都へ出ることについて戸惑いを感じているのである。このように、『吉野の姉君』と『明石の君』は語られる心情についても類似が見られるのである。

また、ほかの共通点として琴の琴も挙げられる。西本寮子は、「琴の琴を与えられているのは吉野の宮と吉野の姉姫君である。……琴の琴といえば、改めて指摘するまでもなく、『源氏』では非常に重視されている楽器であり、ごく限られた人物しか手にしない特殊性を備えている」と指摘し、その注で「『源氏』で琴の琴を演奏するのは光源氏のほかに、螢兵部卿宮、八の宮、末摘花、明石の上、女三の宮、小野の妹尼である」と指摘する。『吉野の姉君』、『明石の君』ともに琴の琴の弾き手なのである。

さらに、吉野の宮と明石の入道に共通点があることが、西本寮子、安田真一により指摘されている。父が娘（『明石の君』、『吉野の姉君』）を男（光源氏、大将）に託すという点である。西本によって「音楽を利用して娘の後見依頼をもちかけるという方法」は、基本的には橋姫巻の八の宮をなぞっているといえるが、そこにはずれがあり、それは「実は、はるか以前、明石巻にその先蹤を見ることが出来る」、「吉野宮には明石入道の面影を取り込んで造形されたと思われる点がいくつか認められる」と指摘され、また安田によって「吉野宮は姫君たちの性関係を自らの意志で決定する」とし、「明石の入道は、自分の思惑を達成するために、娘の〈性〉を利用したと言ってもよからう」と性を支配する父親の存在について指摘されて

『とりかへばや物語』にみる重層的交換（藤井由起）

いる。

以上に見たように、一、互いに松と共に語られること、二、「人笑へ」になることをおそれる心情、三、琴の琴の演奏者であること、四、父が娘を男に託すことの四つの共通点がある。以上から、『吉野の姉君』は『明石の君』の人物像を撰取していることが確認されるのである。

『とりかへばや物語』の物語本編において、『吉野の姉君』と『明石の君』に共通点があることを述べたが、女君と男君の「とりかへ」後である物語末尾においては、実は二人の人物像は重ならない。物語末尾において、『吉野の姉君』が自らは子を産まず、他人の子を育てるといふ点に着目するならば、そこに『明石の君』の人物像は見るべくもない。『吉野の姉君』こそ『明石の君』像から解放されて、独自の人物を形成し始めるのだろうか。それともここにも『源氏物語』にモデルとなる人物がいるのだろうか。

(ii) 養育―『花散里』像の撰取―

『とりかへばや物語』の物語末尾では、『吉野の姉君』には子供がおらず、『女院』腹の若君を養育していると語られる。そして、幸相中将と『吉野の中の君』の『妹姫君』をまかわいがり、左右に置いて育てていると語られる。

F 『吉野の姉君』のその後

吉野山の御方にかやうのこと心もたなくものしたまへば、この若君をぞ御子にしきこえて、とりわきかなしうしたてまつりたまふ。……宮の大納言も、吉野の君の腹に、姫君二人、若君と生まれたまへるを、妹姫君は大將殿の上とりわききこえたまひて、この若君、左右にて生ほしたてまつりたまふ。

(卷四・五一〇—五一二)

《女院》腹の若君というのは男君の子なので、正妻である《吉野の姉君》が引きとって育てるのは納得できるものの、なぜ宰相中將と《吉野の中の君》の子までも引き取って育てるのだろうか。宰相中將、《吉野の中の君》が《妹姫君》を育てるにあたっての支障は何もない。

『源氏物語』において、自らは子を産まず、他人の子を育てるという点に着目すると、《花散里》が想起されよう。『源氏物語』において、源氏は《雲居雁》とのことで悩む夕霧、また思わぬところから見つかった《玉鬘》を六条院に引き取り、《花散里》のもとに預けるのである。

f あ 《花散里》、子を養育①—夕霧

殿はこの西の対にぞ聞こえ預けたてまつりたまひける。「大宮の御世の残り少なげなるを、おはせずなりなん後も、かく幼きほどより見馴らして後見思せ」と聞こえたまへば、ただのたまふままの御心にて、なつかしうあはれに思ひあつかひたてまつりたまふ。

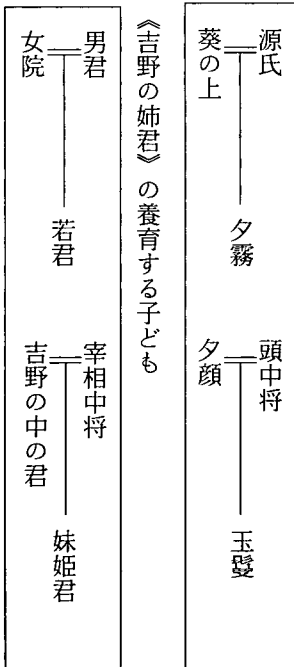
(③少女・六七)

f い 《花散里》、子を養育②—玉鬘
大臣、東の御方に聞こえつけたてまつりたまふ。「あはれと思ひし人の、もの倦じしてはかなき山里に隠れるにけるを、幼き人のありしかば、年ごろも人知れず尋ねはべりしかども、え聞き出でなむ、女になるまで過ぎにけるを、おぼえぬ方よりなむ聞きつけたる時にだにとて、移ろはしはべるなり」とて、「母も亡くなりけり。中將を聞こえつけたるに、悪しくやはある。同じごとうしろみたまへ……」

(③玉鬘・一二七)

物語末尾では《吉野の姉君》は先に述べた《明石の君》でなく、《花散里》の人物像を撰取しているのではないかと考えられる。つまり、《中の君》の《妹姫君》を育てるのも、《花散里》が《玉鬘》を養育したからではないかと考えられる。二人が養育する子については、更に注目できる。《花散里》は夕霧、《玉鬘》を、《吉野の姉君》は、女院腹の若君、《吉野の中の君》の《妹姫君》を養育する。

《花散里》の養育する子ども



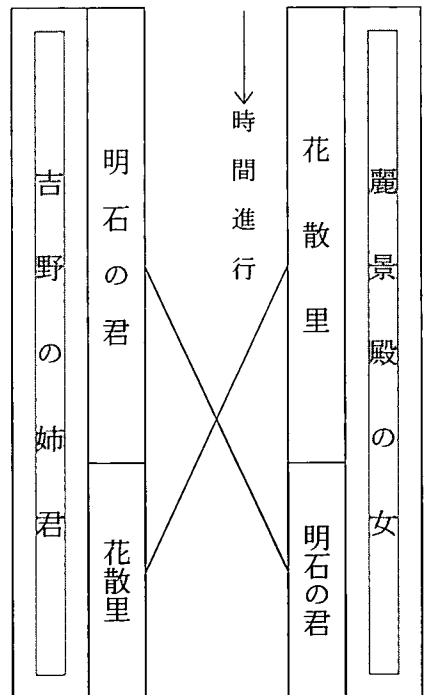
それぞれ上段に関していえば、男君、源氏ともに最初の妻との間にできた男子である。また、下段に関しては、宰相中将は『源氏物語』の頭中将役が割り当てられていることが指摘されており、その娘ということが共通するのである。つまり、男との間に子どもを産まない、二人の子どもを養育する、養育する子どもの出自という三点から『吉野の姉君』は『花散里』の人物像を摂取しているといえる。

以上に見てきたように、『吉野の姉君』一人に、『源氏物語』の二人の人物像摂取の痕跡を確認することができるのである。よって、『吉野の姉君』は、物語本編では『明石の君』、『物語末尾』では、『花散里』の人物像を摂取して、人物造形が行われているといえる。

三、女性像の「とりかへ」の意味

以上を見てみると、『麗景殿の女』が、『花散里』による人物造形から『明石の君』による人物造形へと「とりかへ」られ、同じく『吉野の姉君』が、『明石の君』による人物造形から『花散里』による人物造形へと「とりかへ」られているということになる。そして、それは、同時に『麗景殿の女』と『吉野の姉君』が擬せられた『源氏物語』の女性がそっくりそのまま交換されていることにもなるのである。

『とりかへばや物語』にみる重層的交換（藤井由起）



※□は『とりかへばや物語』の女君

なぜ『源氏物語』中の数多くの女君たちの中でも、特に『花散里』と『明石の君』なのかということについては、六条院の住人であったということが理由として挙げられよう。『とりかへばや物語』の男君が築いた二条殿を、『源氏物語』の源氏が築いた六条院だと考えるのなら、そこに住み、生涯そば近くで仕えた女性として二人が取り上げられたのだと考えるのは、決して不自然なことではあるまい。

物語内で、女性を弁別する項目として挙げられる、「身分」、「子のあるなし」、「容姿」という三点の条件が逆転している二人こそ『とりかへばや物語』の女性に投影するに値したのではないかと考えら

れる。対する『とりかへばや物語』の二人の女性は、女君が心の友として選んだ二人である。しかし、女君と男君の「とりかへ」によって、心の結びつきから体の結びつきへと「身と心」が逆転してしまふ。その結婚の結果として女性の社会的役割を果たさなければならなくなつたので、〈花散里〉、〈明石の君〉という、女性の社会的役割の交換があるのだと考える。

『源氏物語』において、〈花散里〉と〈明石の君〉は、位置的に對称に配置されている。二条院では西の對に〈花散里〉が住まい、〈明石の君〉のために東の對が用意される。また、六条院では夏の町と冬の町というように對称的な位置に置かれていたのである。

h あ 花散里、明石の君の配置① 二条院

東の院造りたてて、花散里と聞こえし、移ろはしたまふ。西の對、渡殿などかけて、政所、家司など、あるべきさまにしおかせたまふ。東の對は、明石の御方と思しおきてたり。

(②松風・三九七)

h い 花散里、明石の君の配置② 六条院

八月にぞ、六条院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ對の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。

(③少女・七八)

『とりかへばや物語』では住居の配置に摂取は見られないが、『源氏物語』の二人の人物造形にならない、『麗景殿の女』と『吉野の姉

君』を物語に配置したのではないか。

なぜこのような「とりかへ」の現象が起るのであるうか。それは、人物像をとりかえることにより、読者の期待を「とりかへ」ることをねらつたのではないかと考えられる。読者が重ねられた人物像に気づき、当然そうなるものだと予想する物語の流れを「とりかへ」てしまうのである。女君と男君の「とりかへ」のみでなく、多様ないくつもの「とりかへ」をしかけ、人物像を交錯させながら、新たな人物像(女性像)を模索していく。ここに『とりかへばや物語』創作の方法の一つがあつたと考えるのである。

注

(1) 森本葉子「『とりかへばや物語』考—逆転する二人の北の方—」

(愛知淑徳大学国語国文「二三号/一九九九年三月)

「この物語は、実は子ども男女の『とりかへ』だけではない、左大臣の北の方も含む『とりかへ』現象が見られる」として、具体的に左大臣の北の方の優位性が物語中期段階で逆転することを指摘する。様々なレベルでの「とりかへ」が存在するが、その一つとして挙げられる。

(2) 引用本文は、新編日本古典文学全集所収『とりかへばや物語』(石壁敬子/二〇〇二年四月二十日/小学館)による。

(3) 物語中に示される時間

卷	時間	頁數
一春		一七〇

その秋	一七七
九月十五日	一八七
十一月十日頃	一九四
その年たちかはり、ついたち頃	一九九
九月ばかり	二三六
秋	二七二
十月ばかり	二九一
師走ばかり	二九二
十二月つごもり方	二九九
年さへ返りぬれば・正月	三〇一
三月ついたち頃	三〇三
(三月)二十日あまり	三〇九
四月	三二三
六月ばかり	三四六
七月ついたち	三六〇
八月ついたち頃	三六九
十一月つごもり	四一九
師走	四三六
年も立ちかはりぬれば	四四六
三月十日頃	四六〇
四月二十日あまり	四七六

『とりかへばや物語』にみる重層的交換 (藤井由起)

六月十余日	四八九
七月	四九八
八月つごもり	四九九
九月ついたちごろ	四九九
年も返りぬ・正月	五〇五
四月	五〇五
ほどなく年月も過ぎかはりて	五〇九
春	五一一
年月も過ぎかはりて	五一〇
年月過ぎかはり	五二一

(4) 桑原博史『とりかへばや物語(一)全訳注』(一九七八年十月十日/講談社)

「この麗景殿の女御の妹は、『源氏物語』の花散里と呼ばれる女性の面影をうつつしたものである。花散里が、失意の光源氏を暖かく包むのに似て、この物語の麗景殿の女御の妹君も、のちの巻々において、中納言の苦しみを慰める人として登場する」(一〇七頁)

(5) 『源氏物語』本文は、新編日本古典文学全集『源氏物語』①③(阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男/一九九四年三月〜一九九六年一月/小学館)による。

(6) 『とりかへばや物語』には全五十二の「月」の用例があるが、「月」とともにあらわれる人物は限られている。「いと明かき月」とともに語られるのは女君のみであり、六例ある。

(7) (3)の太枠内を参照。それまでは順次時間が提示されていたものが、太

枠内では一度に何年か経過する。

- (8) 「荒磯蔭に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今は頼もしき御生い先と祝いきこえさするを、浅き根ざしゆゑやいかごとかたがた心尽くされはべる」(②松風・四二二)、(源氏)「生いそめし根もふかければ武隈の松に小松の千代をならべん」(②薄雲・四三四)、「小松の御返りをめづらしと見けるままに……」(③初音・一五〇)

- (9) 西本寮子「今とりかへばや」における音の効果—楽器にこめられた意味—」(『論集源氏物語とその前後3』所収/一九九二年五月)

- (10) 西本寮子「今とりかへばや」吉野の宮にみる須磨・明石物語の撰取について」(『広島女子大学文学部紀要』二七号/一九九二年二月)

吉野の宮が、女中納言と今大将を娘たちのよき後見役と見極め、後見を依頼するまでの手続きは、基本的に橋姫巻の流れに沿って展開している。八の宮の場合ほど明確な形ではないが、吉野の宮が娘たちの後見を依頼する場面で、楽器を利用していたというのも同じ構図である。だが、子細に検討してみると、その手続きや父親としての心情の方向には、宇治の八の宮とは微妙なずれが認められる。そのずれは、しかし、独自性と言いつけるものではない。なぜならば、音楽を利用して娘の後見依頼をもちかけるという方法は、実は、はるか以前、明石巻にその先蹤を見ることが出来るのであり、橋姫巻もそれをふまえているからである。そのずれの根底に明石巻があり、吉野宮には明石入道の面影を取り込んで造形されたと思われる点がいくつか認められる。(傍線は引要者による)

- (11) 安田真一「〈女〉の世界あるいは〈女〉の不幸—『とりかへばや』四の君をめぐる—」(『古代文学研究第二次』四号/一九九五年一〇月)

- (12) 井上君江「『とりかへばや物語』にみられる「源氏物語」の影響—趣向の類似について—」(『立教大学日本文学』一七号/一九六六年一月)

「中納言に対しての宮の宰相という役割を源氏に対して持っている頭中将はやはり宮の御腹より生まれている」。

桑原博史「とりかへばや物語」(一) 全訳注

「源氏物語」の光源氏に対する頭中将、薫大将に対する匂宮のように侍従の君にも式部卿宮の子が、脇役としてつれ添うことになった」(六二頁)